

貝の穴に河童の居る事

泉鏡花

青空文庫

雨を含んだ風がさつと吹いて、磯^{いそ}の香が満ちている——今日は二時頃から、ズツぷりと、一降り降ったあとだから、この雲の累^{かさな}った空^{そら}合^{あい}では、季節で蒸暑^{むし}かりそうな処^{ところ}を、身に沁^しみるほどに薄寒い。……

木の葉をこぼれる雫^{しずく}も冷い。……糠^{ぬか}雨^{あめ}がまだ降っていても知れぬ。時々ぼつりと来るのは——樹立^{こだち}は暗いほだけれど、その雫ばかりではなさそうで、鎮守の明神の石段は、わくら葉の散ったのが、一つ一つ皆蟹^{かに}になりそうに見えるまで、濡々と森の梢^{こずえ}を潜^{くぐ}って、直線に高い。その途中、処々夏草の茂りに蔽^{おほ}われたのに、雲の影が映って暗い。

縦^{たて}横^{よこ}に道は通ったが、段の下は、まだ苗代にならない水溜^{みずたま}りの田と、荒れた畠^{はたけ}だから——農屋^{のうおくぎ}漁宿^{よしゆく}、なお言えば商家の町も遠くはないが、ざわめく風の間には、海の音もおどろに寂しく響いている。よく言う事だが、四辺^{あたり}が渺^{びよう}として、底冷^{もや}い靄^{もや}に包まれて、人影も見えず、これなりに、やがて、逢魔^{おうま}が時になろうとする。

町屋の屋根に隠れつつ、翼^{たつみ}に展^{ひら}けて海がある。その反対の、山裾^{やますそ}の窪^{くぼ}に当る、石段の左の端に、べたりと附着^{くつつ}いて、溝^{どぶ}鼠^{ねずみ}が這上^{はいあが}ったように、ぼろを膚^{はだ}に、笠^{かさ}も被^{かぶ}らず、一本杖^{いっぽんづえ}の細いのに、しがみつくように縋^{すが}った。杖の尖^{さき}が、肩^{かた}を抽^ぬいて、頭の上へ突出て

いる、うしろ向むきのその肩が、びくびくと、震え、震え、脊丈は三尺にも足りまい。小兒こどもだか、侏儒いっすんぼうしだか、小男だか。ただ船虫の影ひろがの抔うったほどのものが、靄もに沁み出て、一段、一段と這上る。……

しよぼけ返つて、蠢うごめくたびに、嗽しゅうしゅう々と陰氣かすかに幽ひそかな音がする。腐れた肺いが呼吸いきに鳴るのか——ぐしよ濡すれで裾すそから雫しずが垂れるから、骨を絞ひびる響きであらう——傘の古骨が風きしに軋きしむように、嗽々と不氣味に聞こえる。

「しいッ、」

「やあ、」

しッ、しッ、しッ。

曳えい声こゑを揚げて……こつちは陽氣だ。手頃な丸太棒まるたんぼうを差さ荷しいに、漁夫りようしの、半裸はん体の、がッしりした壮佼わかもが二人、真中まんなかに一尾の大魚を釣かるして來た。魚頭かぎなわを鈎かぎ縄なわで、尾はほとんど地摺じずれである。しかも、もりで撃うつた生々しい裂傷さききずの、肉のはぜて、真向まっこう、腮あご、鰭ひれの下から、たらたらと流るる鮮血なまちが、雨路あまみちに滴たつて、草に赤い。

私は話の中のこの魚うおを写出うすのに、出来ることなら小さな鯨おおきと言いたかつた。大鰭おおまぐろか、鮫さめ、鱧ふかでないと、ちよつとその巨大おおきさと凄じさが、真に迫らない氣がする。——ほか

に鮫鰯あんこうがある、それだと、ただその腹の膨れたのを観みるに過ぎぬ。実は石投魚いしなぎである。大温にして小毒あり、というにつけても、普通、私どもの目に触れる事がないけれども、ここに担いだのは五尺に余った、重量、二十貫に満ちた、逞たくましい人間ほどはあろう。荒海の巖礁がんしょうに棲すみ、鱗鋭うろこく、面顰つらしかんで、鰭はたが硬い。と見ると鰭しやちに似て、彼が城の天守に金銀を鎧よろった諸侯なるに對して、これは赤合羽あかがっぱを絡まとった下郎が、蒼黒あおくろい魚身を、血に底光りしつつ、ずしずしと揺られていた。

かばかりの大石投魚おおいしなぎの、さて価値ねうちといえ、両を出ない。七八十錢に過ぎないことを、あとで聞いてちと鬱ふさいだほどである。が、とにかく、これは問屋、市場へ運ぶのではなく、漁村なるわが町内の晩のお菜かずに——荒磯に横づけで、ぐわッぐわッと、自棄やけに煙を吐く艇ふねから、手鉤てかぎで崖肋腹がけあばらへ引摺上げた中から、そのまま跣足はだしで、磯の巖道いわみちを踏んで来たのであった。

まだ船底を踏占めるような、重い足取りで、田畝たんぼ添いの脛すねを左右へ、草摺れに、だぶだぶと大魚おおうおを揺ゆつて、

「しいッ、」

「やあ、」

しつ、しつ、しつ。

この血だらけの魚の現世うつしよの状さまに似ず、梅雨の日暮の森に掛かつて、青瑠璃あおめのうを疊かさねんで高い、石段下を、横に、漁夫りようしと魚で一列になつた。

すぐここには見えない、木の鳥居は、海から吹抜けの風を厭いとつてか、窪地いへでたちまち氾あ濫ふれるらしい水場のせい、一条ひとすじやや広い畝あぜを隔へてた、町の裏通りを——横に通つた、正面と、撞しゆもく木ぶつかに打ぶつた真中まんなかに立たつてゐる。

御柱みはしらを低く覗のぞいて、映画か、芝居のまねきの旗の、手拭てぬぐいの汚れたように、渋茶と、藍あいと、あわれ鰻あわび、小松魚こがつおほどの元氣もなく、棹さおによれよれに見えるのも、もの寂しい。

前へ立つた漁夫りようしの肩が、石段を一步出でて、後うしろのが脚を上げ、真中まんなかの大魚の鰓あごが、端を攀よじつてゐるその変な小男の、段の高さとおなじ処へ、生々なまなまと出でて、横面よこづらを鰭ひれの血で縫ぬおうとした。

その時、小男が伸上るように、丸太棒の上から覗のぞいて、

「無慙むざんや、そのざまよ。」

と云つた、眼まなこがピカピカと光つて、

「われも世を呪のろえや。」

と、首を振ると、耳まで被^{かぶ}さつた毛が、ぶるぶると動いて……腥^{なまぐさ}い。

しばらくすると、薄墨をもう一刷^{ひとはけ}した、水田^{みずた}の際を、おっかな吃驚^{びつくり}、といった形で、

漁夫^{りようし}らが屈腰^{かがみこし}に引返した。手ぶらで、その手つきは、大石投魚を取返しそうな構え

でない。鰯^{としよう}が居たら押えたそうに見える。丸太ぐるみ、どか落しで遁^にげた、たつた今。：

…いや、遁^にげたの候の。……あか禪^{ふんとし}にも恥じよかし。

「大^でかい魚^{さかな}ア石地藏様に化けてはいねえか。」

と、石投魚はそのまま石投魚で野^の倒れているのを、見定めながらそう云った。

一人は石段を密^{そつ}と見上げて、

「何^{なに}も居ねえぞ。」

「おお、居ねえ、居めえよ、お前^{めえ}。一つ劫^{おど}かしておいて消えたずら。いつまでも頭^{あち}われて

いそうな奴じやあねえだ。」

「いまも言うた事だがや、この魚^{うお}を狙^{ねら}つたにしては、小い奴^{ちっこ}だな。」

「それよ、海から己^{われ}たちをつけて来たものではなさそうだ。出^とた処勝負に石段の上に立ち

おつたで。」

「己^{おら}は、魚^{さかな}の腸^{はらわた}から抜出した怨^{おんり}霊^{りよう}ではねえかと思う。」

と掴みかけた大魚腮から、わが声に驚いたように手を退けて言った。

「何しろ、水ものには違えねえだ。野山の狐鼬なら、面が白いか、黄色ずら。青蛙のような色で、疣々が立つて、はあ、嘴が尖つて、もずくのように毛が下つた。」

「そうだ、そうだ。それでやつと思いつけた。絵に描いた河童そっくりだ。」
と、なぜか急に勢づいた。

絵そら事と俗には言う、が、絵はそら事でない事を、読者は、刻下に理解さるるであろう、と思う。

「畜生。今ごろは風説にも聞かねえが、こんな処さ出おるかなあ。——浜方へ飛ばねえでよかつた。——漁場へ遁げりや、それ、なかまへ饒舌る。加勢と来るだ。」

「それだ。」

「村の方へ走つたで、留守は、女子供だ。相談ぶつでもねえで、すぐ引返して、しめた事よ。お前らと、己とで、河童に劫されたでは、うつむけにも仰向けにも、この顔さ立ちっこねえ処だつたぞ、やあ。」

「そうだ、そうだ。いい事をした。——畜生、もう一度出て見やがれ。あたまの皿ア打挫いて、欠片にバタをつけて一口だい。」

丸太棒を抜いて取り、引きそばめて、石段を睨上げたのは言うまでもない。

「コワイ」

と、虫の声で、青蚯蚓あおみみずのような舌をペロりと出した。怪しい小男は、段を昇切った古杉の幹から、青い嘴くちばしばかりを出して、麓ふもとを瞰下みおろしながら、あけびを裂いたような口を開けて、またニタリと笑った。

その杉を、右の方へ、山道が樹こがくれに続いて、木の根、岩角、雑草が人の脊より高く生はえみだ乱れ、どくだみの香深く、薊あざみが凄みじく咲き、野茨のばらの花の白いのも、時ならぬ黄昏たそがれの灰ほのあか明るさに、人の目を迷わして、行手を遮る趣こずえがある。梢に響く波の音、吹当つる浜風はるかは、葎むぐらを渦に廻わして東西を失わす。この坂、いかばかり遠く続くぞ。谿深たにく、峰遥はるかならんと思わせる。けれども、わずかに一町ばかり、はやく絶崖がけの端へ出て、ここを魚見岬うおみさきとも言おう。町も海も一目に見渡さる、と、急に左へ折曲つて、また石段が一個処ある。

小男の頭は、この絶崖際の草の尖さきへ、あの、葎きの笠のようになつて、ヌイと出た。

麓では、二人の漁夫りようしが、横に寝た大魚おおうおをそのまま棄てて、一人は麦藁帽むぎわらぼうを取忘れ、一人の向むこう願はちまき巻とうなすが南瓜かぶりとなつて、棒ばかり、影もぼんやりして、畝うねに暗く沈んだのである。——仔細しさいは、魚が重くて上らない。魔ものが圧おさえるかと、丸太で空を切つて

みた。もとより手ごたえがない。あのばけもの、口から腹に潜つていようも知れぬ。腮えらが動く、目が光つて来た、となると、擬勢は示すが、もう、魚の腹を撲りつけるほどの勇氣も失せた。おお、姫神ひめがみ——明神は女体にまします——夕餉ゆうげの料に、思召しがあるのであらう、とまことに、平和な、安易な、しかも極めて奇恃ことばな言が一致して、裸体の白い娘でない、御供を残して皈かえつたのである。

蒼あおざめた小男は、第二の石段の上へ出た。沼の干たような、自然の丘を繞めぐらした、清らかな境内は、坂道の暗さに似ず、つらつらと濡れつつ薄うす明あかるい。

右斜めに、銕かまぼこ形の杉の大樹の、森々と虚空に茂つた中に社やしろがある。——こつちから、もう謹慎の意を表する状さまに、ついた杖を地から挙げ、胸へ片手をつけた。が、左の手は、ぶらんと落ちて、草摺くさずりの断れたような檻樓ぼろの袖の中に、肩から、ぐなりとそげている。これにこそ、わけがあるう。

まず聞け。——青苔あおこけに沁しむ風は、坂に草を吹靡ふきなびくより、おのずから静しずかではあるが、階段に、緑に、堂のあたりに散つた常盤木ときわぎの落葉の乱れたのが、いま、そよとも動かない。

のみならず。——すぐこの階きざしのもとへ、灯ともしの翁おきな一人、立出たちいづるが、その油差の上

に差置く、燈心が、その燈心が、入相すぐる夜嵐よあらしの、やがて、颯さつと吹起るにさえ、そよりとも動かなかつたのは不思議であろう。

啾しゅうしゅう々々と近づき、啾々と進んで、杖をバタリと置いた。濡鼠たもとの袂きざしを敷いて、階の下に両膝もうひざをついた。

目ばかり光つて、碧額へきがくの金字こんじを仰いだと思うと、拍手かしわでのかわりに——片手は利かない——瘦やせた胸を三度打った。

「願いまつしゆ。……お晩でしゆ。」

と、きやきやと透とおる、しかし、あわれな声して、地に頭こうべを摺りつけた。

「願いまつしゆ、お願い。お願い——」

正面の額の蔭に、白い蝶が一羽、夕顔が開くように、ほんのりと顫あわれると、ひらりと舞まい下り、小男の頭の上をすつと飛んだ。——この蝶が、境内を切つて、ひらひらと、石段口の常夜燈にひたりと附くと、羽に点れたように灯影が映る時、八十年にも近かう、皺しわびた翁おきなの、彫刻また絵画の面より、頬のやや円いのが、萎なえなえ々とした禰宜ねぎいでたちで、蚊脛かすねを絞り、鹿革の古ぼけた大きな燧打袋ひうちぶくろを腰に提げ、燈心を一束、片手に油差を持添

え、揉烏帽子を頂いた、耳、ぼんの窪のはずれに、燈心はその十筋七筋の抜毛かと思う白髪を覗かせたが、あしなかの音をぴたりぴたりと寄って、半ば朽崩れた欄干の、擬宝珠を背に控えたが。

屈むが膝を抱く。——その時、段の隅に、油差に添えて燈心をさし置いたのである。――

「和郎はの。」

「三里離れた処でしゆ。——国境の、水溜りのものでございまつしゆ。」

「ほ、ほ、印旛沼、手賀沼の一族でそろよな、様子を見ればの。」

「赤沼の若いもの、三郎でつしゆ。」

「河童衆、ようござつた。さて、あれで見れば、石段を上らしやるが、いこう大儀そうにあつた、若いにの。……和郎たち、空を飛ぶ心得があらうものを。」

「神職様、おおせでつしゆ。——自動車に轢かれたほど、身体に怪我はあるでしゆが、

梅雨空を泳ぐなら、鳶鳥に負けんでしゆ。お鳥居より式台へ掛らずに、樹の上から飛

込んでは、お姫様に、失礼でつしゆ、と存じてでつしゆ。」

「ほ、ほう、しんびよう。」

ほくほくと頷いた。うなず

「きものも、灰塚の森の中で、古案山子ふるかがしを剥はいだでしゆ。」

「しんびよう、しんびよう……奇き特とくなや、悴せがれ……何、それで大怪我じやと——何としたの。」

「それでしゆ、それでしゆから、お願いに参ったでしゆ。」

「この老ぼれには何も叶かなわぬ。いずれ、姫神への願ねがいじやろ。お取次を申そうじやが、悴せがれ趣は——お薬かの。」

「薬でないでしゆ。——敵かたきうち打うちがしたいのでしゆ。」

「ほ、ほ、そか、そか。敵打。……はて、そりや、しかし、若いに似合わず、流行におくれたの。敵打は近頃はやらぬがの。」

「そでないでしゆ。仕返しでしゆ、喧嘩けんかの仕返ししがしたいのでしゆ。」

「喧嘩をしたかの。喧嘩とや。」

「この左の手を折られたでしゆ。」

とわなわなと身震みふるいする。濡れた肩を絞しすくつて、雫しずくの垂るのが、蓴菜じゆんさいに似た血のかたまりの、いまも流るるようである。

とが
尖つた嘴は、疣立つて、なお蒼い。

「いたましげなや——何としてなあ。対手はどこの何ものじやの。」

「畜生！人間。」

「静に——」

ごぼりと咳いて、

「御前じゃ。」

しゅツと、河童は身を縮めた。

「日の今日、午頃、久しぶりのお天氣に、おらら沼から出たでしゅ。崖を下りて、あの

浜の竈巖へ。——神職様、小鮒、鰯に腹がくちい、貝も小蟹も欲しゅう思わんでご

ざいましゅから、白い浪の打ちかえす磯端を、八葉の蓮華に気取り、背後の屏風巖を、

舟後光に真似て、円座して……翁様、御存じでございましょ。あれは——近郷での、

かくれ里。めつた、人の目につかんでしゅから、山根の潮の差引きに、隠れたり、出たり

して、凸凹凸凹凸凹と、累つて敷く礁を削り廻しに、漁師が、天然の生簀、生船がま

えにして、魚を貯えて置くでしゅが、鯛も鰻も、梅雨じけで見えんでしゅ。……掬い残り

の小さい鯛子が、チ、チ、チ、（笑う。）……青い鰭の行列で、巖竈の簀の中を、

きらきらきらきら、日南^{ひなた}ぼっこ。ニコニコとそれを見い、見い、身のぬらめきに、手^て唾^{つばき}して、……漁師^{さかな}が網^{つぐの}を繕うでしゆ……あの真似^{まね}をして遊んでいたでしゆ。——処^{ところ}へ、土地^{いづか}ところには聞馴^{ききな}れぬ、すずしい澄んだ女子^{おなご}の声^{こゑ}が、男^{おとこ}に交つて、崖上^{さか}の岨道^{そびみち}から、巖^{いわか}角^どを、踏^ふんず、縋^{すが}りつ、桂井^{かつらい}とかいてあるでしゆ、印半纏^{しるしはんてん}。——

「おお、そか、この町の旅籠^{はたご}じやよ。」

「ええ、その番頭^{ばんとう}めが案内^{まゐ}でしゆ。円鬚^{まるまげ}の年増^{としぞう}と、その亭主^{ていしゅ}らしい、長面^{ながづら}の夏帽子^{なつぼうし}。

自動車の運転手^{しやうどうしや}が、こつこつと一所^{いこ}に來たでしゆ。が、その年増^{としぞう}を——おばさん、と呼ぶでございましゆ、二十四五^{にじゅうご}の、ふつくりした別嬪^{べっぴん}の娘^{むすめ}——ちくと、そのおばさん、が、おばしあん、と云うか、と聞こえる……清^{すが}い、甘^{あま}い、情^{なさけ}のある、その声^{こゑ}が堪^たらんでしゆ。」

「はて、異^いな声^{こゑ}の。」

「おららが真似^{まね}るようではないでしゆ。」

「ほ、ほ、そか、そか。」

と、余念^{よねん}なさそうに頷^{うなず}いた——風^{かぜ}はいま吹^ふきつけたが——その不思議^{ふしぎ}に乱^{みだ}れぬ、ひからびた燈心^{とうしん}とともに、白髪^{しらが}も浮世^{うきよ}離^{はな}れして、翁^{おきな}さびた風情^{ふうせい}である。

「翁様^{おきなさま}、娘^{むすめ}は中肉^{ちゅうにく}にむつちりと、膚^{はだ}つきが得^えう言^いわれぬのが、びちやびちやと潮^{うしほ}へ入^いった。

棲つまをくるりと。」

「危あぶなやの。おぬしの前でや。」

「その脛はざの白さ、常夏とこなつの花の影がからみ、磯風に揺れ揺れするでしゆが——年増も入れば、夏帽子も。番頭も半纏すその裾をからげたでしゆ。巖根いわねづたいに、鰻あわび、鰻、栄螺さざえ、栄螺。……小鰯こいわしの色の綺麗さ。紫式部といったかたの好きだったというもつともで……お紫むらと云うがほんとうに紫……などというでしゆ、その娘が、その声で。……淡い膏あぶらも、白おしろ粉いも、娘の匂いそのままで、膚はだざわりのただ粗あらい、岩に脱いだ白足袋なかの裡に潜ひそって、熟じつと覗のぞいていたでしゆが。一波上るわ、足許あしもとへ。あれと裳もすそを、脛はざがよれる、裳が揚る、紅あかい帆が、白百合の船にはらんで、青々と引く波に走るのを見ては、何とも、かとも、翁様。」

「ちと聞苦しゆう覚えるぞ。」

「口へ出して言わぬばかり、人間も、赤沼の三郎もかわりはないでしゆ。翁様——処ところででしゆ、この吸盤すいつき用意の水搔みずかきで、お尻そつを密ひそと撫なでようものと……」

「ああ、約束は免れぬ。和郎たちは、一族一門、代々それがために皆怪我をするのじやよ。」

「違うでしゆ、それでした怪我ならば、自業自得で怨恨はないでしゆ。……蛙手に、底を泳ぎ寄つて、口をばくりと、」

「その口でか、その口じやの。」

「ヒ、ヒ、ヒ、空ぎまに、波の上の女郎花、桔梗の帯を見ますと、や、背負守の扉を透いて、道中、道すがら参詣した、中山の法華経寺か、かねて御守護の雑司ヶ谷か、真紅な柘榴が輝いて燃えて、鬼子母神の御影が見えたでしゆで、蛸遁げで、岩を吸い、吸い、色を変じて磯へ上った。

沖がやがて曇つたでしゆ。あら、気味の悪い、浪がかかったかしら。……別嬪の娘の畜生め、などとぬかすでしゆ。……白足袋をつまんで。――

磯浜へ上つて来て、巖の根松の日蔭に集り、ビール、煎餅の飲食するのは、羨しくも何ともないでしゆ。娘の白い頤の少しばかり動くのを、甘味そうに、屏風巖に附着いて見ているうちに、運転手の奴が、その巖の端へ来て立つて、沖を眺めて、腰に手をつけ、気取つて反るでしゆ。見つけられまい、と背後をすり抜ける出合がしら、錠の浜というほど狭い砂浜、娘等四人が揃つて立つでしゆから、ひよいと岨路へ飛ぼうとする処を、

――さて、さて、――

と娘の声でしゆ。見惚れて顚が頭われたか、罷了と、慌てて足許の穴へ隠れたでしゆわ。

間の悪さは、馬蛤貝のちようど隠家。——塩を入れると飛上るんですってねと、娘の目が、穴の上へ、ふたになつて、熟と覗く。河童だい、あかんべい、とやつた処が、でしゆ……覗いた瞳の美しさ、その麗さは、月宮殿の池ほどござり、睫が柳の小波に、岸を縫つて、靡くでしゆが。——ただ一雫の露となつて、逆に落ちて吸わりようと、蕩然とすると、痛い、疼い、痛い、疼いッ。肩のつけもとを棒切で、砂越しに突挫いた。」

「その怪我じや。」

「神職様。——塩で釣出せぬ馬蛤のかわりに、太い洋杖でかッぽじった、杖は夏帽の奴の持ものでしゆが、下手人は旅籠屋の番頭め、這奴、女ばらへ、お齒向きに、金齒を見せて不埒を働く。」

「ほ、ほ、そか、そか。——かわいいや忤、忤が怨は番頭じや。」

「違うでしゆ、翁様。——思わず、きゆうと息を引き、馬蛤の穴を刎飛んで、田打蟹が、ぼろぼろ打つでしゆ、泡ほどの砂の沫を被つて転がって遁げる時、口惜しきに、奴の穿いた、奢った長靴、丹精に磨いた自慢の向脛へ、この唾をかッと吐掛けたれば、この一

呪詛^{とのろい}によつて、あの、ご秘蔵の長靴は、穴が明いて腐るでしゅから、奴に取つては、リ
 ヨウマチを煩らうより、きとこたえる。仕返しは沢山でしゅ。——怨^{うらみ}の的は、神職様——
 娘ども、夏帽子、その女房の三人でしゅが。」

「一通りは聞いた、ほ、そか、そか。……無理も道理も、老^{おい}の一存にはならぬ事じゃ。い
 ずれはお姫様に申上ぎようが、こなた道理には外れたようじゃ、無理でのもなかりそう
 に思われる、そのしかえし。お聞済みになろうか。むずかしいの。」

「御鎮守の姫様、おきき済みになりませぬと、目の前の仇^{かたき}を視ながら仕返しが出来んので
 しゅ、出来んのでしゅが、わア、」

とたちまち声を上げて泣いたが、河童はすぐに泣くものか、知らず、駄々^{だだ}子がものねだ
 りする状^{さま}であつた。

「悴、悴……まだ早い……泣くな。」

と翁は、白く笑つた。

「大慈大悲は仏菩薩^{ぶつぼさつ}にこそおわすれ、この年老いた気の弱りに、毎度御意見は申すなれ
 ども、姫神、任^{にんぎよう}侠の御氣風ましまし、ともあれ、先んじて、お袖^{すがた}に縋^{すが}つたものの願
 事を、お聞届けの模様がある。一たび取次いでおましようぞ——えいとな。……

や、や、や、横扉から、はや、お縁へ。……これは、また、お軽々しい。」

廻廊の縁の角あたり、雲低き柳の帳とばりに立つて、臙おぼろに神々しい姿の、翁の声に、つと打うち向かいたまえるは、細ほそおもて面おもてただ白玉の鼻筋通り、水晶を刻んで、威のある眦まなじり。額髪、眉

のかかりは、紫の薄い袖頭巾そでずきんにほのめいた、が、匂はさげ髪かみの背に余る。——紅地金

欄らんのさげ帯して、紫の袖長く、衣紋えもんに優しく引合わせたまえる、手かさねの両の袖口に、

塗骨の扇つましく持添えて、床板の朽目の青あお芒すすきに、裳もすその紅うすく燃えつつ、すらす

らと荅こたへなす白い素足で渡つて。——神か、あらずや、人か、巫女みこか。

「——その話の人たちを見ようと思う、翁、里人の深切に、すきな柳を欄干さきへ植えて
たもつたは嬉しいが、町の桂井館は葉のしげりで隠れて見えぬ。——広前の、そちらへ、
参ろう。」

参ろう。」

はらりと、やや蓮葉はすはに白脛しらはぎのこぼるるさえ、道きよめの雪の影を散らして、膚はだを守護

する位が備わり、包ましやかなお面おもてより、一層世の塵ちりに遠ざかつて、好色の河童の痴たわけた

目にも、女の肉とは映るまい。

姫のその姿が、正面の格子に、銀色の染まるばかり、艶々つやつやと映った時、山やま鴉がらすの嘴くちばし

太しふとが——二羽、小刻みに縁を走つて、片足ずつ駒下駄こまげたを、嘴くちばしでコトンと壇の上に揃えた

が、鴉がなつた沓くつかも知れない、同時に真黒まつくろな羽が消えたのであるから。

足が浮いて、ちらちらと高く上つたのは——白い蝶が、トタンにその塗下駄くぐの底を潜くぐて舞上つたので。——見ると、姫はその蝶に軽く乗つたように宙を下り立つた。

「お床しょうぎ几、お床几。」

と翁が呼ぶと、栗鼠りすよ、栗鼠よ、古栗鼠の小栗鼠が、樹の根の、黒檀こくたんのごとくに光沢つやあつて、木目は、蘭を浮彫にしたようなのを、前脚で抱えて、ひよんと出た。

袖近く、あわれや、片手の甲の上に、額を押伏せた赤沼の小さな主は、その目を上ぐるとひとしく、我を忘れて叫んだ。

「ああ、見えましゆ……あの向う丘の、二階の角の室まに、三人が、うせおるでしゆ。」

姫の紫の棲下つましたに、山懷やまふところの夏草は、淵ふちのごとく暗く沈み、野茨のばら乱れて白きのみ。沖

の船の燈ともが二つ三つ、星に似て、ただ町の屋根は音のない波を連ねた中に、森の雲に包ま

れつつ、その旅館——桂井の二階の欄干が、あたかも大船の甲板のように、浮いている。

が、鬼神の瞳に引寄せられて、社の境内なる足許に、切立きつたての石段は、疾はやくその舩ふなばたに昇る梯子はしこかとばかり、遠近おちこちの法規おきてが乱れて、赤沼の三郎が、角の室という八畳の縁近に、鬢びんの房ふさりした束髪と、薄手な年増の円鬘まるまげと、男の貸広袖かしどらを着た棒縞ぼうじまさえ、霽もやを分け

て、はつきりと描かれた。

「あの、三人は？」

「はあ、されば、その事。」

と、翁が手庇^{てびさし}して傾いた。

社の神木の梢^{こずえ}を鎖した、黒雲の中に、怪しや、冴えたる女の声して、

「お爺さん——お取次。……ぼう、ぽつぽ。」

みみずく
木菟の女性である。

「皆、東京の下町です。円鬻は踊の師匠。若いのは、おなじ、師匠なかま、姉^{あね}分のもの娘です。男は、円鬻の亭主です。ぽつぼう。おはやし方の笛吹きです。」

「や、や、千里眼。」

翁が仰ぐと、

「あら、そんなでもありませんわ。ぽつぽ。」

と空でいった。河童の一肩、聳^{そび}えつつ、

「芸人でしゆか、土農工商の道を外れた、ろくでなしめら。」

「三郎さん、でもね、ちよつと上手だつて言いますよ、ぼう、ぽつぽ。」

翁ははじめて、氣だるげに、横にかぶりを振って、

「芸一通りさえ、なかなかのものじゃ。達者というも得難いに、人間の癖にして、上手な
どとは行過ぎじやぞよ。」

「お姫様、トツピキピイ、あんな奴はトツピキピイでしゆ。」

と河童は水掻みずかきのある片手で、鼻の下を、べろべろと擦こすっていった。

「おおよそ御合点と見うけたてまつる。赤沼の三郎、仕返しは、どの様に望むかの。まさ
かに、生命いのちを奪とろうとは思うまい。厳しゅうて笛吹めかちは、女どもは片耳殺そぐか、鼻を削る
か、蹇あしなび、跛びつこどころかの——輕うて、氣絶ひきつけ……やがて、息を吹返さすかの。」

「えい、神職かんぬし様。馬蛤まての穴にかくれた小さなものを虐しいたげました。うってがえしに、あの、
ご覧ろうじ、石段下を一杯に倒れた血みどろの大魚おおうおを、雲の中から、ずどどど！だしぬけ
に、あの三人の座敷へ投込んで頂きたいでしゆ。氣絶しようが、のめろうが、鼻かけ、齒はッ
かけ、大な賽おおきさいの目の出次第が、本望でしゆ。」

「ほ、ほ、大魚を降らし、賽に投げるか。おもしろかる。悴せがれ、思いつきは至極じゃが、折
から当お社もお人ずくなじや。あの魚は、かさも、重さも、破れた釣鐘ほどあって、のう、
手頃には参らぬ。」

と云つた。神に使う翁の、この譬喩たとえの言を聞かれよ。筆者は、大石投魚あちを頭あわすのに苦心した。が、こんな適切な形容は、凡慮には及ばなかつた。

お天守の杉から、再び女の声で……

「そんな重いもの持運ぶまでもありませんわ。ぼう、ぽっぽ——あの三人は町へ遊びに出掛ける処なんです。少しばかり誘よそいをかけますとね、ぼう、ぽっぽ——お社ぢか近まで参りましょう。石段下へ引寄せておいて、石投魚の亡者を飛上らせるだけでも用はたりましようとう存じますのよ。ぼう、ぽっぽ——あれ、ね、娘は髪のもつれを撫なでつております、頸えりの白うございますこと。次の室まの姿見へ、年増が代つて坐りました。——感心、娘が、こん度は円まるまげ髻、——あの手がらの水色は涼しい。ぼう、ぽっぽ——髻びんの鬘みを撫でつけますよ。女同士のあしたの処は、しおらしいものですわね。酷ひどいめに逢うのも知らないで。……ぼう、ぽっぽ——可哀相ですけど。……もう縁側へ出ましたよ。男が先に、氣取つて洋杖ステッキなんかもつて——あれでしょう。三郎さんを出いたのは——帰途かえりは杖にして縋すがろうと思つて、ぼう、ぽっぽ。……いま、すぐ、玄関へ出ますわ、ごらんなさいまし。」

真ま暗くらな杉に籠こもつて、長い耳の左右に動くのを、黒髪で捌さいた、女顔の木菟みみずくの、紅あかい嘴くちばしで笑うのが、見えるようで凄すさましい。その顔が月に化けたのではない。ごらんなさいまし

という、言葉が道をつけて、トンネル隧道を覗のぞかす状さまに、遙はるかにその真正面へ、ぱつと電燈の光のやや薄赤い、桂井館の大式台あらわが顕れた。

向う齒の金齒が光つて、印半纏しるしはんてんの番頭が、沓脱くつぬぎの傍そばにたつて、長靴を磨ふいているのが見える。いや、磨ふいているのではない。それに、客のではない。捻ひねり廻くまして鬱ふさいだ顔が色しよくは、愍然ふびんや、河童のぬめりで腐くつて、ポカンと穴があいたらしい。まだ宵だというに、番頭のそうした処は、旅館の閑散をも表示する……背後うしろに雑木山を控えた、鍵の手形なりの総二階に、あかりの点ついたのは、三人の客が、出掛けに障子を閉めた、その角座敷ばかりである。

下廊下を、元氣よく玄関へ出ると、女連の手は早い、二人で歩行板あゆみいたを衝つと渡つて、自分たちで下駄を揃えたから、番頭は吃驚びっくりして、長靴を掴つかんだなりで、金齒むきだを剥出しに、世辞笑いで、お叩頭しづをした。

女中が二人出て送る。その玄関の燈ともを背に、芝草と、植込の小松の中の敷石を、三人が道なりに少し畝うねつて伝つたつて、石造いしづくりの門にかかげた、石ぼやの門燈に、影を黒く、段を降りて砂道へ出た。が、すぐ町から小半町引込んだ坂で、一方は畑になり、一方は宿かこいの石垣が長く続くばかりで、人通りもなく、そうして仄暗ほのくらい。

ト、町へたらたら下りの坂道を、つかつかと……わずかに白い門燈を離れたと思うと、
 どう並んだか、三人の右の片手三本が、ひよいと空へ、揃って、踊り構えの、さす手に上
 った。同時である。おなじように腰を捻った。下駄が浮くと、引く手が合って、おなじく
 三本の手が左へ、さつと流れたのはじまりで、一列なのが、廻って、くるくると巴に附
 着いて、開いて、くるりと輪に踊る。花やかな娘の笑声が、夜の底に響いて、また、くる
 りと廻って、手が流れて、棲が蹴る。足腰が、水馬の刎ねるように、ツイツイツイと
 刎ねるように坂くだりに行く。……いや、それがまた早い。娘の帯の、銀の露の秋草に、
 円鬘の帯の、浅葱に染めた色絵の蛸が、飛交って、茄子畑へ綺麗にうつり、すいと消え、
 ぱつと咲いた。

「酔つとるでしゆ、あの笛吹。女どもも二三杯。」と河童が舌打して言った。
 「よい、よい、遠くなり、近くなり、あの破鐘われがねを持扱う雑作に及ばぬ。お山の草叢くさむらか
 ら、黄腹、赤背の山鱗やまうろこどもを、絢交なえまぜに、三筋の処を走らせ、あの踊りの足許へ、茄
 子畑から、によつによつと、蹴出す白脛しらはぎへ搦からましよう。」この時の白髪は動いた。

「爺い。」

「はあ。」と烏帽子が伏る。

姫は床几に端然と、

「男が、口のなかで拍子を取るが……」

翁は耳を傾け、皺手を当てて聞いた。

「拍子ではござりませぬ、ぶつぶつと唄のようで。」

「さすが、商売人。——あれに笛は吹くまいよ、何と唄うえ。」

「分りましたわ。」と、森で受けた。

「……諏訪——の海——水底、照らす、小玉石——手には取れども袖は濡さじ……おーもーしーろーお神楽らしいんでございますの。お、も、しーろし、かしらも、白し、富士の山、麓の霞——峰の白雪。」

「それでは、お富士様、お諏訪様がた、お目かけられものかも知れない——お待ち……あれ、気の疾い。」

紫の袖が解けると、扇子が、柳の膝に、丁と当った。

びくりとして、三つ、ひらめく舌を縮めた。風のごとく駆下りた、ほとんど魚の死骸の鰭のあたりから、ずるずると石段を這返して、揃って、姫を空に仰いだ、一所の鎌首は、如意に似て、ずるずると尾が長い。

二階のその角座敷では、三人、顔を見合わせて、ただ呆れ果ててぞいたりける風情がある。

これは、さもありそうな事で、一座の立女形たるべき娘さえ、十五十六ではない、二十を三つ四つも越しているのに。――円鬚は四十近で、笛吹きのごときは五十にとどく、というのが、手を揃え、足を挙げ、腰を振って、大道で踊ったのであるから。――もつと深入した事は、見たまえ、ほつとした草臥れた態で、真中に三方から取巻いた食卓の上には、茶道具の左右に、真新しい、播粉木、および杓子となんいう、世の宝貝の中に、最も興がった剽軽ものが揃って乗っていて、これに目鼻のつかないのが可訝いくらい。ついでに婦二人の顔が杓子と播粉木にならないのが不思議なほど、変な外出の夜であつた。

「どうしたっていうんでしょ。」

と、娘が搥粉木の沈黙を破つて、

「誰か、見ていやしなかったかしら、可厭だ、私。」

と頤おとがを削つたようにいうと、年増は杓子うづむで俯向うつむいて、寂しそうに、それでも、目もとには、まだ笑わらいの隈くまが残つて消えずに、

「誰が見るものかね。踊よりか、町で買った、搥粉木とこの杓しゃもじをさ、お前さんと私とで、持つて歩行あるいた方がよっぽどおかしい。」

「だって、お婆さん——どこかの山の神様のお祭に踊る時には、まじめな道具だって、おじさんが言うんじゃないの。……御幣ごへいとおんなじ事だって。……だから私——まじめに町の中を持つたんだけれど、考えると——変だわね。」

「いや、まじめだよ。この搥粉木と杓子しゃもじの恩を忘れてどうする。おかめひよつとこのように滑稽おどけもの扱いにするのは不届き千万さ。」

さて、笛吹——は、これも町で買った楊弓ようきゆう 弓 仕立の竹に、雀が針がねを伝つたつて、嘴くちばしの鈴を、チン、カラカラカラカラカラ、チン、カラカラと飛ぶ玩弄品おもちゃを、膝について、鼻の下の伸びた顔でいる。……いや、愚に返つた事は——もし踊があればなりに続いて、下り坂

を發奮はすむと、町の真中まんなかへ舞出して、漁師町の棟を飛んで、海へころげて落ちたろう。

馬鹿気ただけで、狂人きちがいではないから、生命いのちに別条はなく鎮静した。——ところで、と

ぼけきつた興は尽きず、神巫みこの鈴から思いついて、古びた玩弄品屋の店で、ありあわせた

この雀を買ったのはじまりで、笛吹はかつて、麻布辺の大資産家で、郷土民俗の趣味と、

研究と、地鎮祭をかねて、飛驒ひだ、三河、信濃しなのの国々の谷谷谷深く相交こうさする、山また山の

僻村へきそんから招いた、山民一行の祭に参じた。桜、菖蒲あやめ、山の雉子きじの花踊。赤鬼、青鬼、白

鬼の、面も三尺に余るのが、斧おの、鉞まさかりの曲舞する。浄め砂置いた広庭の壇場には、幣ぬさをひ

きゆい、注連しめかけわたし、来ります神の道は、(千道ちみち、百綱ももづな、道七つ。)とも言え、

(綾あやを織り、にしき錦を敷きて招じる。)と謡うほどだから、奥山人が、代々に伝えた紙細工に、

巧わざを凝らして、千道百綱を虹にじのように。飾の鳥には、雉子やまどり、山鶏、秋草、もみじを切出

したのを、三重みえ、七重ななえに——たなびかせた、その真中まんなかに、丸太薪たきぎを堆うずたかく烈々と燻くべ、大

釜かまに湯を沸かせ、湯玉の霰あられにたばしる中を、前後あとしきに行違い、右左に飛廻たつて、松明たいまつ

の火に、鬼も、人も、神巫みこも、禰宜ねぎも、美女も、裸も、虎の皮も、紅くれなはの袴はかまも、燃えたり、

消えたり、その、ひゆうら、ひゆ、ひゆうら、ひゆ、諏訪の海、水底みなそこ照らす小玉石、を

唄いながら、黒雲に飛行ひぎようする、その目覚しきは……なぞと、町を歩行あるきながら、ちと手

真似で話して、その神樂の中に、青いおかめ、黒いひよつとこの、扮装いでたちしたのが、こてこてと飯粒をつけた大杓子おおしやくし、べたりと味噌を塗った太搗粉木ふとすりこぎで、踊り踊り、不意を襲つて、あれ、きやア、ワツと言う隙ひまあらばこそ、見物、いや、参詣の紳士はもとより、装よそおいを凝らした貴婦人令嬢の顔へ、ヌツと突出し、べたり、ぐしやツ、どろり、と塗る……と話す頃は、円鬚はらすじが腹筋を横によるやら、娘が拝むようにのめつて俯向うつむいて笑うやら。ちよつとまた踊が憑いた形になると、興に乗じて、あの番頭を噴出ふきださせなくつては……女中からかおう。……で、あろう事か、荒物屋で、古新聞で包んでよこそう、というものを、そのままで結構よ。第一色気ざかりが露出むきだしに受取ったから、荒物屋のかみさんが、おかしがって笑うより、禁厭まじないにでもするのか、と気味の悪そうな顔をしたのを、また嬉しがつて、寂寥せきりようたる夜店のあたりを一廻り。横町を田畝たんぼへ抜けて——はじめから志した——山の森の明神の、あの石段の下へ着いたまでは、馬にも、猪いのししにも乗った勢いきおいだった。そこに……何を見たと思う。——通合させた自動車に、消えて乗って、わずかに三分。

……

宿へ遁返にげかえった時は、顔も白澄むほど、女二人、杓子と搗粉木を出来得る限り、掻合かきあわせた袖の下へ。——あら、まあ、笛吹は分別で、チン、カラカラカラ、チン。わざと、チ

ンカラカラカラと雀を鳴らして、これで出迎えた女中だちの目を逸^そらさせたほどなのであった。

「いわば、お儀式用の宝ものといつていいね、時ならない食^{ちやぶだい}卓に乗ったって、何も氣味の悪いことはないよ。」

「氣味の悪いことはないったって、一体変ね、歸る途^{みち}でも言つたけれど、行がけに先刻^{さつき}、宿を出ると、いきなり踊出したのは誰なんでしょう。」

「そりや私だろう。掛引のない処。お前にも話した事があるほどだし、その時の祭の踊を實地に見たのは、私だから。」

「ですが、こればかりはお前さんのせいともいえませんわ。……話を聞いていますだけに、何だか私だったかも知れない氣がする。」

「あら、おばさん、私のようよ、いきなりひとりでに、すつと手の上ったのは。」

「まさか、巻込まれたのなら知らないこと——お婿さんをとるのに、間違つたら、高島田に結^いおうという娘の癖に。」

「おじさん、ひどい、間違つたら高島田じゃありません、やむを得ず洋^{ハイカラ}髪なのよ。」

「おとなしくふつくりしてる癖に、時々ああいう口を利くんですからね。——吃^{びっくり}驚させ

られる事があるんです。——いつかも修善寺の温泉宿で、あすこに廊下の橋がかりに川水を引入れた流の瀬があるでしょう。巖組にこしらえた、小さな滝が落ちるのを、池の鯉が揃つて、競つて昇るんですわね。水をすらすらと上るのは割合やさしいようですけれど、流れが煽つて、こう、颯とせく、落口の巖角を刎ね越すのは苦艱らしい……しばらく見ていると、だんだんにみんな上った、一つ残ったのが、ああもう少し、もう一息という処で滝壺へ返つて落ちるんです。そこよ、しっかりとつてこの娘——口へ出したうちはまだしも、しまいには目を据えて、熟と視たと思うと、湯上りの浴衣のままで、あの高々と取った欄干を、あツという間もなく、跣足で、跣足で跨いで——お帳場で素晴らしいですよ。随分おてんばさんで、二階の屋根づたいに隣の間へ、ばア——それよりか瓦の廂から、藤棚越しに下座敷を覗いた娘さんもあるけれど、あの欄干を跨いだのは、いつの昔、開業以来、はじめてですつて。……この娘……御当人、それで巖飛びに飛移つて、その鯉をいきなりつかむと、滝の上へ泳がせたじやありませんか。」

「説明に及ばず。私も一所に見ていたよ。吃驚した。時々放れ業をやる。それだから、縁遠いんだね。たとえばさ、真のおじきにした処で、いやしくも男の前だ。あれでは跨いだんじやない、飛んだんだ。いや、足を宙へ上げたんだ。——」

「知らない、おじさん。」

「もつとも、一所に道を歩行あるいていて、左とか右とか、私と説が違って、さて自分が勝つと——銀座の人込の中で、どうです、それ見たか、と白い……」

「多謝。
サンキユウ

「遅たぐましい。」

「取消し。」

「腕を、拳固がまえの握にぎりこぶし拳で、二の腕の見えるまで、ぬつと象の鼻のように私の目のさきへ突出つきだした事があるんだからね。」

「まだ、踊つてるようだわね、話がさ。」

「私も、お婆さん、いきなり踊出したのは、やっぱり私のように思われてならないのよ。」

「いや、ものに誘われて、何でも、これは、言合わせたように、前後甲乙、さっぱりと三人同時いっときだ。」

「可厭いやねえ、気味の悪い。」

「ね、お婆さん、日の暮方に、お酒の前。……ここから門のすぐ向うの茄子畠なすばたけを見ていたら、影法師のような小さなお嫗ばあさんが、杖に縋すがつてどこからか出て来て、畑の真中まんなかへ

ぼんやり立って、その杖で、何だか九字でも切るような様子をしたじやアありませんか。
 思出すわ。……鋤すきくわ鋤じやなかったんですもの。あの、持ってたもの撞しゅもく木じやありません？
 悚然ぞつとする。あれが魔法で、私たちは、誘い込まれたんじゃないんでしょうかね。」
 「大丈夫、いなかでは遣る事さ。ものなりのいいように、生なれ生なれ茄子なすのまじないだよ。」
 「でも、畑のまた下道には、古い穀倉こくぐらがあるし、狐か、狸か。」
 「そんな事は決してない。考えているうちに、私にはよく分った。雨続きだし、石段すべが迂るだの、お前さんたち、蛇が可恐こわいものといって、失礼した。——今夜も心ばかりお鳥居の下まで行つた——毎朝拍手かしわでは打つが、まだお山へ上らぬ。あの高い森の上に、千木ちぎのお屋根が拝される……ここの鎮守様の思召さめがねしに相違ない。——五月雨さみだれの徒然つれづれに、踊を見よう。——さあ、その気で、更あらためて、ここで真面目まじめに踊り直そう。神様にお目にかけるほどの本芸は、お互にうぬぼれぬ。杓子舞、搦粉木踊だ。二人は、わざとそれをお持ち、真面目だよ、さ、さ、さ。可いかい。」
 笛吹は、こまかい薩摩さつまの紺こん紺がすりの単衣ひとえに、かりものの扱帯しぎをしめていたのが、博多はかたを取って、きちんと貝の口にしめ直し、横縁の障子を開いて、御社おやしろに。——一座退しぎつて、女二人も、慎み深く、手をつかえて、ぬかずいた。

栗鼠^{りす}が仰向け^{あおむ}にひっくりかえった。

あの、チン、カラ、カラカラカラカラ、笛吹の手の雀は雀、杓子は、しゃ、しゃ、杓子と、す、す、す、播粉木を、さしたり、引いたり、廻り踊る。ま、ま、真顔を見さいな。笑わずにいられるか。

泡を吐き、舌を噛^かみ、ぶつぶつ小じれに焦^じれていた、赤沼の三郎が、うっかりしたように、思わず、にやりとした。

姫は、赤地錦の帯脇に、おなじ袋の緒をしめて、守^{まもり}刀^{がたな}と見参^{まも}らせたは、あらず、一管の玉の笛を、すつとぬいて、丹花の唇、斜めに氷柱^{つらら}を含んで、涼しく、気高く、歌口を

木菟^{みみずく}が、ぼう、と鳴く。

社の格子が颯^{さつ}と開くと、白兔が一羽、太鼓を、抱くようにして、腹をゆすって笑いながら、撥音^{ばちおと}を低く、かすめて打った。

河童の片手が、ひよいと上って、また、ひよいと上って、ひよこひよこ足で拍子を取る。

見返りたまい、

「三人を堪忍してやりや。」

「あ、あ、あ、姫君。踊って喧嘩はなりませぬ。うう、うふふ、蛇も踊るや。——藪の穴から狐も覗いて——あはは、石投魚も、ぬさりと立った。」

わつと、けたたましく絶叫して、石段の麓を、右往左往に、人数は五六十、飛んだらう。赤沼の三郎は、手をついた——もうこうまいる、姫神様。……

「愛想のなさよ。撫子も、百合も、あるけれど、活きた花を手折ろうより、この一折持つていきや。」

取らしようと、笛の御手に持添えて、濃い紫の女扇を、袖すれにこそたまわりけれ。

片手なぞ、今は何するものぞ。

「おんたまものの光は身に添い、案山子のつづれも錦の直垂。」

翁が傍に、手を挙げた。

「石段に及ばぬ、飛んでござれ。」

「はあ、いまさらにお恥かしい。大海蒼溟に館を造る、跋難陀竜王、娑伽羅竜王、摩那斯竜王。竜神、竜女も、色には迷う験し候。外海小湖に泥土の鬼畜、怯弱の微輩。」

馬蛤まかの穴へ落ちたりとも、空を翔かけるは、まだ自在。これとても、御恩の姫君。事おわして、お召とあれば、水はもとより、自在のわっぱ。電火、地火、劫火ごうか、敵火、爆火、手一つでも消しますでしゆ、ごめん。」

とばかり、ひようと飛んだ。

ひよう、ひよう。

翁が、ふたふたと手を拍たたいて、笑い、笑い、

「漁師町は行水時よの。さらでもの、あの手負ておいが、白い脛すねで落ちると慄然ふびんじゃ。見送つてやれの——鴉からす、鴉。」

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

雲は低く灰汁あくみなぎを漲みなぎらして、蒼穹あおぞらの奥、黒く流るる処、げに直ちよっけん 顕けんせる飛行機の、一万里の荒海、八千里の曠野あらのの五月闇さつきやみを、一閃いつせんし、掠かすめ去つて、飛ぶに似て、似ぬものよ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

北をさすを、北から吹く、逆らう風はものともせねど、
 海洋の濤^{なみ}のみだれに、雨一しき
 り、どつと降れば、上下^{うへした}に飛^{とび}かわり、翔^{かけ}交^{まじ}つて、

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

ひよう、ひよう。

かあ、かあ。

ひよう、

ひよう。

.....

.....

昭和六（一九三一）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

初出：「古東多万 第一年第一號」やぼんな書房

1931（昭和6）年9月

※初出時の題名は「貝の穴に河童が居る」です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：本山智子

校正：門田裕志

2001年7月19日公開

2012年5月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貝の穴に河童の居る事

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>